

連載**社会教育施設について考える (WG 報告)****～第 7 回：前橋市児童文化センター編～****福澄孝博（北大院・工／生涯学習施設支援 WG 代表）、生涯学習施設支援 WG****1. はじめに**

社会教育施設について考える本連載記事、これまでにいくつかの施設の具体例も取り上げてきたが、今回は「前橋市児童文化センター（図 1）」を紹介する。同施設については、福澄が中間報告的に行った招待講演でも、小さな施設が工夫して頑張っている例として紹介した [1]。このような施設の運営の在り方は、他施設にも勇気を与え、我々に元気をいただける事例と考え、今回特にセンターの職員の方にインタビューを行い、報告記事に纏め直した。

1.1 招待講演での概要

上記招待講演の中では、前橋市児童文化センターを「巧く運営されている施設」のひとつとして、同年に開催された日本プラネタリウム協議会（JPA）全国大会で WG メンバーが見聞きした話を基に、紹介した。その概要を集録原稿から転記する形で再掲すると、「施設の重要さを役所・学校関係者・市民がみな共有、市民が（子どもの頃に）悉皆で利用し誰もが知る施設、市民教育の拠点を民間業者に任せるなどありえないとの認識、盛んなボランティア活動即ち市民の参画、といった特徴を感じ取られた。予算・職員は削られる中で“工夫して続ける”が彼らの解。」[1]である。今回、この内容につき深く掘り下げてお話を伺い、また、何かそのころからの変化があれば、と尋ねた。

1.2 インタビュー

実際にインタビューに答えてくださったのは、佐藤博之館長（この春まで前橋市教育委

員会教育長を務められ、また、以前にも館長として新館への改築・オープンへの道筋をつけられたなど、施設の概要・背景に熟知された方）、新井寿係長（前述の JPA 全国大会に向け、学校から異動された方：勤務 3 年目）の両氏である。お二人には、事前に何度か電子メールで打ち合わせたのち、9 月中旬に電話で直接お話を伺った。では、早速お聞きした内容の紹介に入っていこう。なお、文中敬称や敬語などは略させていただいた。

2. 施設の特徴**2.1 設立の経緯**

設立は昭和 44 年、時代は高度成長に伴い交通事故も多くなり、環境汚染が大きく問題になるなどもあり、人びとの、そして子ども達の安全・安心も心配な状況になってきていた。そんな子ども達に自転車教室の場所を提供するとともに、あわせて子どもの文化活動の拠点にしようという計画が持ち上がった。その文化活動として採択された対象の一つが「夢である宇宙」であった。その為にその宇宙の美しさ、翻って地球全体の環境を子ども達に伝えようと選ばれた道具（手段）がプラ



図 1 前橋市児童文化センター・建物全景

ネタリウムだった：子ども達は2コマのタイムスケジュールで自転車安全教室およびプラネタリウムによる天文学習をすることになったのだ。

2.2 プラネタリウムの紹介

(1) 概 要

上記のように、出来上がった施設は、合唱団等の文化活動も取り入れながら、当初は宇宙に関するテーマが中核の、科学館的な仕組みを基本とするものとなった。プラネタリウムとしては当時北関東で最初の例で、定員60席でスタートした。昭和63年に機械の入れ替えもあったが、五藤光学の光学式プラネタリウムでマニュアル制御のものだった。

その後、平成24年にリニューアルした児童文化センターでは、ハイブリッド方式・デジタル制御を取り入れた(図2)。操作しやすく、『全天周映像も含め、表現の幅が大きく広がった。』という方向での更新となり、番組内容もより充実するようになった。それでも基本は同じまま。



図2 現プラネタリウムのコンソール

(2) 番組としてのプラネタリウムの特徴

学習投影が基本で、子ども達の天文の学習にできるだけ適したプログラムを作ってきた。星座早見盤を見ながら、実際の星空観察につながる『授業』を実践している。センターが

所有しているバスを活用し、一度に2クラスくらいの子供達を連れて来て、プラネタリウムによる授業を1コマ行う。そしてもう1コマ、自転車の乗り方教室を受けて帰っていく。

このように、設立時から「子ども達のための宇宙教室」が中心に据えられ、ずっと運営されてきた。子ども達がプラネタリウムに入ると、その時々様子や実態を見ながら、対話を基本に、実態に応じた番組(授業)を進行する。

土曜日曜には一般用プログラムも投影しており、これまで沢山の番組を作ってきた。センターは「こども公園」という場所にあるので、基本的に子どもも大人もいろんな人が来る。その日の来館者の様子を見ながら、実態や反応に応じて話を進める。この辺りは、観覧者が大人であっても、子ども達に対する授業の時と共通した姿勢である。一般向け番組でも、子ども(授業)向けで培ったノウハウが生かされている。即ち、『対話』で番組を進めていく、というのが彼等のスタイル。様子を見ながら、臨機応変に、だ。

昨今、多くのプラネタリウムで見られる「オート投影」は、担当者の肉声による解説もなく動いていく。しかし、当センターではデジタル併用化された今でも、解説は常に肉声で行っている。ハイブリッドの良い機械が入ったが、「人による」投影を続けているのだ。

(3) 番組制作など運営舞台裏

昭和44年の開館当時から、スライドの映写機を使った紙芝居風の番組を作ってきた。ずっと自分たちで脚本を考えて来た。それだけではない。声優としては演劇クラブ(児童文化センターで活動)の子ども達が中心に出演している。スライドの原画も、一般市民に微々たる謝礼で引き受けてもらっている。

少ない予算で、お金が無い中、工夫して協

力して制作できたというだけでなく、「観覧者」が「制作者」でもあり、施設が市民に深く浸透している。子どもの頃に、一度は、いや、何度も行ったことがある場所であり、かつ、自分たちのもの・作りあげたもの、なのだ(図3: 活動の雰囲気の伝わる写真を、と提供してもらった)。



図3 プラネタリウムコンサートの様子

(4) 番組舞台裏_2: 困ったことなど、も

ここで少しいじわる、だが「逆に運営上で困ったことはないですか」と問いかけてみたところ、意外な回答が戻ってきた。

精密機械なので、運用は埃との戦い。その点は少し大変だ。子ども達の出入りが多いので、どうしても埃を連れてくる：まさに「嬉しい悲鳴」だ。

運営上で言うと、デジタル制御のプラネタリウムでは、最終的なプログラミング言語による入力が難しい。プログラミングをちゃんとできる人がいないと困ってしまう。最初は自前で行っていたが、平成 29 年度からは、プログラムによる三次元映像の表現及び入力作業を、業者に委託している。(年 10 本の番組)。しかし、業者の担当者が来て、同じように「あーだこーだ」言いながら、あたかも業者からの方すら彼らの仲間であるかのように、『手作り感覚』で作業を進めてくれている。

このようにして、新しい番組を毎月 1 本ずつのペースで制作しており、現在もずっと継

続している。(各作品は 2 か月間投影し、「星座のお話」と「天文学シリーズ」を月交替で交互に制作している。毎月 1 本ずつ新番組に入れ替わることになる。)

(5) 番組の運用体制

一般用のプログラムそれぞれは、10～15 分ぐらいの番組で、これまでに述べたように手作りのもの。この番組投影をはさんで、全体での投影時間は約 40 分とし、当日の星空や話題の天文現象等の生解説を前後に付加し、楽しくわかりやすく伝える。今、目の前にいる子ども達・市民に、宇宙の姿をもっと身近に感じてもらいたい。星座に関する神話やお話についてももっと親しみをもってもらいたい。そんなことを願いつつ運営している。

一般用番組の投影回数は、土日祝日は午前・午後各 2 回ずつの計 4 回、平日は午後 1 回(学校や幼稚園・保育園対象の学習投影は別時間で投影)。それぞれの回で、前述の「星座のお話」と「天文学シリーズ」の 2 番組のうち 1 本を交互に投影している。

番組の変遷をたどると、①紙芝居で物語、物語の語りはテープで流した→②パワーポイント導入、電子映像となったが基本は同じ→③デジタル全天周映像を導入したハイブリッドプラネタリウム、しかし基本は全く同じ。毎年 10～12 本の番組を 48 年間作り続けてきた。

投影担当者は、1 回の投影の中で、番組が流れる間はしゃべらないが、それ以外の部分は観覧者と対話しつつ進める。ちょっと大変だが、反応を直接とらえながら、その時その時で冗談も出るし、うまくやると拍手をもらえたりする(下手やると…泣いて帰ったり、も)。

先にも紹介したように、デジタルになってからは、よりやりやすくなり、手作りの表現の幅が広がった。例えば木星を大きくしたり、

流れ星を飛ばしたり、などだ。まあ、一方で仕込みが大変な面もあるが・・・(これも嬉しい悲鳴)。

3. 現場からのメッセージ

他館へのメッセージも含め、施設運営について広くお考えを

私たちの方が、逆に勉強させていただきたい。

なんといっても生解説だと思う。いらした方との会話を通して解説したり内容を変えたりで、雰囲気が一回ごとに違うため「インタラクティブな解説」と言える。

こんな解説をしたら進歩するんじゃ、といった情報も共有しあいたい。

ここで、現場の雰囲気を知らため、直接の天文担当者である新井さんと交代

3年間活動した実感として大型館との違いを挙げると、(これまでに話が出たように自前の番組、ということもあるが)40分の中で番組自体は10～15分。それ以外は担当者の生解説で、職員によって味が違うこと。そんな中、私は元もと天文が趣味だったが、他の職員は星に関する仕事をする場にいることすらも、ここに来て初めて、という者がほとんど。しかし、星空観察会を企画して自ら参加したり、書籍で研究したり、パソコンの天文シミュレーションなどで研究を重ねたり、と、常に努力を続けており、はたから見ていても頭が下がる思いだ。

また、職員同士の横のつながりが非常に良くて、情報交換が自然にできている。これが他の施設にも参考にいただける運営の肝ともいえる。「こんなの良かったよ」「こうしたらどうか」「こうやったらウケたよ」などなど。基本的には月1回、情報交換の時間を設けたり投影上の工夫の仕方を披露しあったり等をしている。しかし、やはり何よりも、普段の横のつながりを大切にした職員間の活発

な会話を大切にしたい。

4. インタビューを終えて

今回、お二人のお話を伺って得た印象は「私自身一緒に働きたい職場だ」の一言に尽きる。インタビューの最中にも「私ならどうかな、どんな工夫ができるかな」とイメージが実感を伴って広がった。

設置者・利用者・運営者の全てがわくわくできる、夢のある活動。これを施設の『原動力』にできる、と示されたと感じる。特に、利用者側が同時に「運営者」としても参画したり、いつも幼い頃から利用してきた「おらが町の児童館」という愛着と誇りが感じられるなど、まさに地域に根差した活動、利用者の方を向いた運営、に深く感銘を受けた。

利用者と運営者が一体。協力している、にとどまらず「混然一体」とすらなっているのだ。この姿勢は、2年前のそれとなんら変わることなく、大切に受け継がれ続けていた。

最後に、お忙しい時間の中、事前の電子メールやり取りも含め、インタビューに応えてくださった佐藤さん、新井さんに改めて感謝する。また、本インタビューは群馬県生涯学習センターの濱根寿彦さんに新井さんを紹介していただいたことで実現したことを明記し、濱根さんへの謝辞とする。

文 献

- [1] 福澄孝博(2015)「社会教育施設の現状分析とこれから ～我々には何ができるか～」, 第29回天文教育研究会集録, 43.